

Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.18 No.5 May 2017

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
どじょうの話に救われて
／高見宇造..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (116)
勢山文書⑦「おさしづ」の写し翻刻
／安井幹夫..... 2
- ・ 『教祖伝』探究 (35)
かんろだいの石首請①
／深谷忠一..... 3
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」
的世界観への未来像～ (37)
第5章 高橋和巳と『邪宗門』③
／井上昭夫..... 4
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (21)
「引き出し」としての「くろぐつな」③
／佐藤孝則..... 5
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道
の様相 (5)
戦前のアメリカ伝道と日系移民社会④
／尾上貴行..... 6
- ・ 「おふでさき」の標的用法 (21)
動詞について⑥
／深谷耕治..... 7
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (23)
第2巻の「本部事情」の「おさしづ」と「道」
／澤井治郎..... 8
- ・ 地域福祉を拓く ー新たな寄付文化の創造
ー (29)
CSRと寄付②
／渡辺一城..... 9
- ・ 遺跡からのメッセージ (23)
イスラエルの遺跡調査⑨ ガリラヤ湖畔の
要塞都市、エン・ゲヴ
／桑原久男..... 10
- ・ 現代宗教と女性 (14)
語られた女性教皇
／金子珠理..... 11
- ・ 図書紹介 (98)
『ジャン＝ジョゼフ・スユランー17世紀
フランス神秘主義の光芒ー』
／金子 昭..... 12
- ・ 平成28年度公開教学講座要旨：現代の事
情に対する天理教の思案 (6)
再生可能エネルギー ー火・水・風を活
かした電力の再考ー
／佐藤孝則..... 13
- ・ English Summary..... 14
- ・ おやさと研究所ニュース..... 15
第26回宗教研究会（難波真理）／第
301回研究報告会（堀内みどり）／『グ
ローカル天理』合本のご案内／新刊の
ご案内／平成29年度公開教学講座の
ご案内

巻頭言

どじょうの話に救われて

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

3月5日付の『産経新聞』は一面に大きく「自殺者1.5万人以下」「政府10年後 先進国水準」と見出しを付けています。政府が10年後に自殺者を「1万4千～1万5千人以下」とする目標数値を盛り込んだ「自殺総合対策大綱」を今夏に閣議決定するという記事です。日本は自殺者が平成10年に3万人を超えて以降、突出して高い水準が続いているため、関係者は「かなり意欲的な数字」としています。自殺防止の取り組みとして、平成18年に医療機関の整備や調査研究を求める自殺対策基本法が成立しました。これにより一定の効果も挙りましたが、この数字も尋常ではありません。自殺者を思いとどまらせる根本的方策が待ち望まれますが、私たち信仰者に何ができるのか真剣に考えたいと思います。

私は以前、教会本部主催の講習会で講師を務めたことがあります。この講習会は仕事や人間関係に悩み、また家事や育児、介護に追われ、ともすれば自らを見失いかねない現代人にどのように天理の教えを伝えるかというねらいがありました。私はいろいろと考えた挙げ句、「どじょう」を取り上げることにしました。『天理教教典』第3章「元の理」には、「親神は、どろ海中のどぢよを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた。」とありますが、そのお話です。

実は学生時代、深谷忠政先生著の『元の理』（道友社）を読んで大変感銘を受けたことがありました。そこには、「どぢよは泥にまみれても、清水で洗えばきれいになる。このことを思案すれば、人間は仮令悪にそまっても、本性は清浄なものであり、本教の信仰によって、悪を洗いきる可能性を持っていると悟らせていただいでよいであろう。」と書かれていました。私は「現代人が求める教理はこ

れだ！」と思いました。

「親神様はなぜ、人間の種はどじょうだと教えられたのでしょうか。種とはそのものの本質です。どじょうは泥の中にも粘液で覆われておりその身に泥が付きません。これは何を意味するのでしょうか。私たちは世の中の塵芥にまみれるなか、自分の人生はこんなはずではなかったとか、時には自らに絶望することすらあるかも知れません。しかし私たちはどじょうのように綺麗です。何度でもやり直せる。これが元の理のメッセージです」と申し上げました。

このお話で私の意は通じるかと思いましたが、果たして後日、ある受講者から次のような感想が届きました。

「私はどじょうの話に救われて家に帰ろうと思います。死ななくてよかったのです。私自身は何も変わっていないのです。これからは生きてよいのです。先生、有り難うございます」とありました。数多い受講生の中に、自ら命を絶とうと考えている方がおられたということです。私は身震いがするほどの戦慄を覚えるとともに、心から「ああ、間に合っただけよかった」と思いました。死にたいと思うほどの苦しみ、それは何か。もちろん私には分かる術もありません。しかしこの方は、それでも「生きたい」という一縷の希みを託して、おぼげに帰られたのでしょうか。「元の理」のどじょうは間違いなく一人の尊い命を救ったのです。

ギリシア神話のなかで、死を神格化した神であるタナトス (Thanatos) を引き合いに出すまでもなく、現代社会には「死の誘惑」が満ちあふれています。しかしそれに立ち向かうのは、私たちの「元の理」です。陽気ぐらしを教えていただく私たちは、教えを伝える大きな責任を自覚しなければなりません。